

お池と早苗

きたゆきこ



お池と早苗

早苗の通学路の途中には、一軒の古びた空き家がある。完全木造の平屋建て、昭和の駄菓子屋を思わせるようなガラス戸は、水垢のような白いカスがこびりつき、ところどころにヒビが入っている。壁の木は朽ち、ひび割れて、家全体が原型をほとんど留めてい^{てい}なかった。壁と屋根があるという点に於いて、辛うじて“家”と呼べているような体だ。塀などという閉鎖的なものは無く、庭から外の道路に直行できるのだ。その庭も、草が子供の背丈ほどまで伸び、ものによっては大人と同じくらいの背丈の草も生えていた。

近所では、当然のごとく幽霊屋敷というあだ名で呼ばれており、夜間はその道を通るのを嫌がる人がほとんどだった。しかし、早苗は例外だった。その古びた平屋が、早苗は好きなのだ。特に気に入りが、道路と面していない反対側の庭にある、小さな池だった。

庭とは名ばかりの雑草の群生地^にひっそりと埋まっているその小さな池には、蛙やめだか、あめんぼなど、小さな生き物たちが楽しそうに生活を営んでおり、早苗は彼らの様子を観察し始めると、時間の経つのを忘れるほど没頭してしまうのだ。

今日も、学校から帰る途中で足はその池に向き、空がオレンジ色に染まるまで、飽きずに彼らの生活を覗き見させてもらっていた。

「あら、もうだいぶいい時間じゃないの？もう帰ったら？」

池の周りに茂る朝顔の葉に乗った小さな蛙が早苗をじっと見つめながら言った。

「そう？まだ大丈夫だよ。もう少しここにいるよ。」

早苗は黄色い帽子を頭の後ろに追いやりながら答えた。

「あら、帽子はちゃんと被らないと駄目よ。まんまるさんの熱はとても強いんだから。」

蛙が、パチリと一つ瞬きをして言った。

「もうお日様は沈んだもの。大丈夫だよ。それに、早苗は強いもん。」

早苗は両膝を抱える手を解き、膝をポリポリと搔いた。

「あら、そんな嘘は私には通用しないのよ。あなた、この間倒れたでしょ？」

早苗はもともと大きな目をもっと見開いた。

「なんで知ってるの？」

「あら、私は何でも知っているのよ。知ってるでしょ？」

小さな蛙は大きな口をパカッと開けて、得意気だった。

「へへ、お前こそ、嘘言うんじゃないぜ。この間この子が自分で言ってたじゃないか。」

小さな池の上を、アイススケートの選手よろしくスイスイと滑りながら、あめんぼが近づいてきた。

「あら、あんたに話してないじゃない。あっち行ってよ。」

「数が多い方が楽しいよ。行かないで。ここに居て。」

「へへ、照れるじゃねえか。まあ、居てやってもいいぜ。」

あめんぼは池の縁に座る早苗の近くを、自分のテクニックを見せ付けるように右に左にスイスイと滑って見せた。

「気持ちよさそうだね。私もそんな風に滑りたいな。」

「へへ、あんたはあんまり激しい運動ができないんだろ。だから無理だぜ。」

「あら、それっぽっちの動きなんか、運動に入らないわよ。大丈夫、あんたにもできるわよ、あれくらい。」

葉っぱの上で四足を上下に小さく屈伸させた蛙は、その勢いを利用して思い切りジャンプをし、池の表面に小さな水飛沫を作った。

「へへ、ちょっと気をつけてくれよ。あんまり波を立てないでくれ。」

ゆらゆらと揺れる水面に合わせてるように、ちいさなあめんぼの体も上下した。

「あら、運動っていうのはね、こういうもののことを言うのよ。」

水面から目と口だけ出した蛙が、鼻息荒く早苗の方へ泳いできた。

「あら、もう本当に帰った方がいいんじゃない？親も心配しているよ。」

「そうだなあ。もう、まんまるさんも姿を消しちゃいそうだしなあ。そろそろ、帰った方がいいなあ。」

早苗の足元の地面から、いつのまにかひょっこりとミミズが顔を出していた。

「・・・分かったよ。帰りたくないけど、帰るね。また明日も来てもいい？」

蛙もあめんぼもミミズも、膝を抱える早苗の小さな手が薄っすらと震えているのが分かった。

「あら、来ちゃいけないなんて、誰が言ったの？」

「へへ、いつでも大歓迎だぜ。俺はずっとここにいるからな。」

「そうだねえ。おいでなさいな。待ってるからねえ。」

早苗はにっこりと微笑んだ。

「ありがとう。また明日ね！」

ミミズを踏まないように注意して立ち上がった早苗は、草を掻き分け掻き分けして、空家の脇を通り抜け、人通りのほとんど無くなった道を目指した。

「ただいま！今日は学校がお昼までだったの。だから、いつのより長く居られるよ。」

早苗は池のほとりの指定席に膝を抱えて座り込み、相変わらず気持ちよさそうにスイスイと滑るあめんぼに言った。

「へへ、あんたのそのニコニコ顔、俺は好きだぜ。」

「ありがと。」

早苗はちょっとはにかんで、自分の靴の先を見つめた。

「あら、今日は早いじゃないの。学校どうしたの？サボったの？」

池を縁取る早苗の頭ほどの大きさの岩の上に、蛙がちょこんと座っている。

「ううん、今日は学校お昼までだったの。」

「あら、そうなのかい。ご飯はもう食べたのかい？」

蛙の質問に、早苗は首を縦にも横にも振らなかった。

「どうしたのかい？答えたくないのかなあ。」

今日は全身を冷たい土の上に気持ちよさそうに伸ばしているミミズが、ひょいと顔を上げて早苗を見た。

「・・・食べて、ない。」

「あら、じゃあお家に帰らないと。お腹空いてるんじゃない？」

「へへ、飯ってのは、食べる時に食っとかないと、次いつありつけるか分からねえぜ。」

「あら、この子とあんたは違うんだよ。おこがましいね、全く。」

「へへ、本当のことを言ったまでだぜ。」

そんな二人のやり取りを見ていた早苗の目に、薄っすらと涙が浮かんできた。

「どうしたのかい？何かあったのかなあ。」

みみずがよっこらしよと体を起こし、頭をもたげた。

「あら、そりゃ私も気になるよ。何かあったのかい？」

「へへ、俺、あんたの悲しい顔は好きじゃねえな。」

「みんな、ありがとう。あのね、早苗、どうしてもお腹が空かなくて・・・でも、食べないとママがとても心配するし、とても悲しい顔をするから・・・早苗、どうしたらいいのか、分からなくなっちゃうの。」

膝を抱える早苗の細い腕に、蛙がぴよんと飛び移ってきた。その冷たい感触を、早苗は笑顔で歓迎した。

「あら、あんた、顔色が悪いわね。どっか悪かったりするのかい？」

それを聞いたあめんぼとミミズが、蛙の言葉の真偽を確認しようと、それぞれ自分の限界まで早苗に近づいてきた。

「本当だねえ。今日はまんまるさんがキレイに出ているのに、おまえさんの顔は、なんだか白いねえ。」

「へへ、白ってというか、青って言うんじゃないか。」

「あら、本当に大丈夫なのかい？」

三人の顔を順番に見つめ、早苗はついに顔を伏せてしまった。

「へへ、どうしたどうした。いつもみたいに、俺の好きな顔をしてくれよ。」

「あら、別にあんたを喜ばせてやる義理なんか、この子にはないんだよ。うるさいね。」

早苗の腕をペタペタと歩いて、蛙は顔の近くまでやってきた。そこまで早苗に近づける蛙を、あめんぼとミミズが羨ましそうに見ているのを、蛙は気付かないふりをした。そして、二人に聞こえないように、早苗に囁いた。

「あら、私たちはね、あんたが何だって、あんたのこと好きなんだよ。それだけは、覚えておきなよ。」

「へへ、なんだなんだ。女同士の内緒のお話か。何だ、教えてくれよ。」

「そうだねえ。気になっちゃうよねえ。」

「あら、うるさい男共だねえ。ね？」

早苗に同意を求めながら、蛙はペタペタと早苗の腕を引き返し、端まできたら、上下に何度か屈伸をして、ぴよんと岩に飛び移った。早苗は、ぽつりと呟いた。

「早苗ね、早苗の体ね、他の人と少し違うんだって。」

「このままだとね、早苗、死んじゃうかもしれないの。」

「へへ、死んじゃう？人間ってのは俺たちと違って、何十年も生きるんだろ？知ってるぞ。だからお前さんは、まだ死なねえよ。」

「あら、馬鹿だねえ。人間だってね、病気やらなにやらで死ぬ事だってあるんだよ。」

「ちよっとねえ。そんなこと言ったら、可哀相じゃないかねえ。」

「ううん、いいの。早苗、気にしてないよ。」

いつの間にか顔を上げた早苗は、口元だけに悲しげな微笑を浮かべていた。

「へへ、おかしいな。俺はあんたのその顔が好きなはずなのに、今のはあんまり好きじゃねえなあ。」

「あら、何はともあれさ、さっきのこと、覚えておくんだよ。」

「それだよねえ。一体、何を喋ったのかねえ。気になるよねえ。」

再び冷たい地面にペタリと横たわったミミズは、もどかしいとでも言うように体をクネクネとさせた。

「ありがとう。早苗も、みんな大好きだよ。早苗の大事なお友達だよ。」

「あら、照れるじゃないの。」

「へへ、照れるじゃねえか。」

「照れちゃうよねえ。」

気がつけば、すでに辺りは暗くなり始めていた。

「あら、大変大変。あんた、もうお家にお帰りな。もう暗くなっちゃっているよ。」

「へへ、つつい話し込みしまったな。楽しかったぜ。」

「またおいでねえ。待っているからねえ。」

「うん、そうだね。また明日来れば、みんなに会えるもんね。また、明日。」

ほんの少し名残惜しそうに眉を下げたが、自分に言い聞かせるように立ち上がり、早苗はニコリと笑った。

「へへ、それだけ、それぞれ。俺の好きな、あんたの顔だけ。」

あめんぼが、小さな池を縦横無尽にスイスイと泳ぎまくって見せた。

「あら、なに興奮してんだか。」

そういう蛙も、岩の上でパカッと口を開け、嬉しそうに体を上下させていた。

「さよなら、みんな。またね。また来るからね。」

ミミズを踏まないようにいつも以上に慎重に草を掻き分ける早苗の姿は、あっという間にみえなくなかった。残った三人は、互いにまた明日と挨拶をして、それぞれの寢床へと帰っていった。

「あら、おかしいねえ。今日はあの子、来なかったわね。」

岩の上から、いつも早苗が現れる方を見つめる蛙が、小首をちょこんと傾げた。

「へへ、どうしたんだろうな。ここに来ないなんて、初めてのことで。」

自慢のスケートを見せ付ける相手がいななあめんぼは、水面にただプカプカと浮いているだけだった。ミミズに至っては、土の中から出てこない。

「あら、もうまんまるさんが姿を消しちゃいそうだから、今日はもう来ないだろうねえ。」

蛙は器用に足をペタペタと動かして、体を池の方へ向けた。

「へへ、ちょっと待ってくれよ。」

あめんぼは、蛙の佇む岩と反対岸へスイッと移動した。

「あら、あの子、明日はくるかしら。」

「へへ、そりゃ来るさ。また来るねって、言ってたじゃねえか。」

「あら、そうだねそうだね。じゃあ、あの子が帰ってくるまで、ゆっくりと待ちましょ。」

二、三回屈伸をして、蛙は小さな水しぶきをあげて池の中へと姿をけした。小さな波を巧みに乗りこなしながら蛙が消えた池の底をしばらく眺めていたあめんぼも、雑草が池の方にまで伸びてきている一帯に向かって滑り出した。

お池と香苗とその家族

首に掛けたタオルで額の汗を拭いながら大きなガラス窓の外に目をやると、小さいながらも綺麗に整えられた庭の片隅の小さな池を、娘が覗き込んでいる姿が見て取れた。

「はあ～疲れた！」

同じくタオルで顔中を拭きまわしてながら、すぐ隣に立った旦那に軽く労いの言葉を掛けた。

「お疲れ様～疲れたね。昭宏、片付けどれくらい進んだ？」

「日常生活の必需品は大方片付いたし、後は時間を見つけて少しずつ片付けてこうか。」

言いながら庭に続くガラス窓を大きく開け放して全身で風を受け、その心地よさに二人揃って思わず目を閉じた。

「そうね。もう日も沈んできたし、そろそろご飯でも食べに行こうか。」

「おう！行こう行こう！」

待ってましたとばかりに両手をパンパンと打ち鳴らして喜びを露にする旦那から、再び池のほとりの娘に視線を移した。

「香苗！落ちないように気をつけろよ～。」

父親のその声に、香苗はしゃがみ込んだまま顔をぐるりとこちらに向けたかと思うと、ぴよんと飛ぶように立ち上がり、一直線に走り寄ってきた。

「パパ、ママ！あのねあのね、虫さん達がね、“おかえり”って。」

「おお、そうか。あの池には虫さん達がいるんだな。」

香苗を抱っこしようと庭に降りて屈みこんだ父親の首にしがみつきながら、香苗は嬉しそうに頷いた。そんな二人を、伊織はキラキラと輝く、美しく清らかなものを見るように目を細めた。

「あのね、蛙さんがね、待ってたのよ～って言ってね、お池の虫さんがね、変わってないなって言ったの。」

「おお～そうかそうか。今度父さんにもその友達を紹介してくれよ。」

「お母さんにもね。」

「うん！」

元気に返事をすると、香苗はまだ遊び足りないといった感じで庭を駆け回りだした。そんな娘を見送った昭宏が、立ち上がって腰を伸ばしながら、伊織の方へ向き直った。

「それにしても、よくこんな掘り出し物物件見つけたな。最初はあるなボロ家でどうするのかと思ったけど、立替えりゃこんなに立派になるし、庭も整備したら、中々風情があっていいし。特にあの池。あれがいいなあ。香苗もお気に入りみたいだし。」

「姉さんの葬儀で実家に帰ってきたときにね、ここの前を通って、なんでか急に、ここに住みたいって思ったのよ。小さい頃からずっと通い慣れたとこなのに、急に变よね。」

「でも、お陰でいい家が建てれたよ。」

元気いっぱい庭を駆け回る娘の姿を見つめていると、自然と二人の顔には笑顔が溢れた。

「あの子・・・本当に、姉さんに似てるなあ。」

「そりゃ伊織は双子だからな。伊織の子供が伊織のお姉さんに似てても、不思議じゃないよ。」

「そうね。でも、笑った顔とか、本当に小さい頃の姉さんにそっくりで・・・なんだか嬉しくなっちゃうの。」

開け放たれた窓辺に座った昭宏の隣に、伊織も静かに腰を下ろした。

「姉さん、小さい頃から体が弱くて、あんな風に元気に走り回るなんてできなかったから・・・」

「もう、一年になるな。」

「ええ、あつと言う間のような、まだ一年っていう感じもするし・・・なんか複雑。」

「きっと、早苗さんも、俺たちのこと見守ってくれているよ。」

「うん。きっとそうね。」

「あら、あの子、やっと帰ってきたわね。嬉しいねえ。」

「へへ、あの笑った顔。全然変わっていないぜ。」

「そうだねえ。少し体が小さくなったけど、ずうっと元気になったしねえ。」

「あら、本当にそうね。あんな風に走り回るなんて、昔はできなかったものね。」

「へへ、何はともあれ、あの子、ここに住むらしいからな。これからはずっと、一緒にいられるじゃねえか。」

「そうだねえ。本当に嬉しいねえ。これからはずっと、あの子とあの子の家族を見守ってあげるねえ。」

岩の上で小さな蛙が嬉しそうに体を上下させている。池の水面では、あめんぼが自慢のスケートで滑りまわっている。ミミズは冷たい土の感触を楽しみながらも、頭をもたげて楽しそうに左右に振っている。

小さなお池に向かって満面の笑顔を溢れさせた香苗が元気よく掛けて来る姿を、昭宏と伊織、蛙とあめんぼとミミズと、そして早苗が、優しく見守っていた。

お池と早苗

<http://p.booklog.jp/book/53630>

著者 : kita-yukiko-0727

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kita-yukiko-0727/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53630>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53630>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ